

「大きな問い」とボランティア活動に関する研究¹⁾

—大学生のスピリチュアリティを育む—事例—

村上 祐介 鳴門教育大学予防教育科学センター *

A study of “Big Question” and voluntary activities:
A case for cultivating university students’ spirituality

MURAKAMI Yusuke

問題と目的

本稿では、近年いくつかの議論が行われている「高等教育におけるスピリチュアリティ」に焦点をあて、大学生のスピリチュアリティを涵養するうえで大学教育に求められることについて一考を加えたい。より具体的には、スピリチュアリティを、生きる意味や目的などの「大きな問い (Big Question)」について思慮する心の働きとして定義したうえで、スピリチュアリティ教育の実践形態の一つとして提言がなされている「ボランティア活動」が、こうした営みにおいて、どのような役割を果たし得るかを探索的に調査することを目的とする。

近年、心理、医療・看護、福祉等、様々な領域でスピリチュアリティへの関心が高まりつつある中、高等教育領域でも、ここ十数年の間にスピリチュアリティに関する議論が行われている (Chickering, Dalton, & Stamm, 2006; Duerr, Zajoc, & Dana, 2003; Jablonski, 2001; Tisdell, 2003; Rockenbach & Mayhew, 2013; Subbiondo, 2006)。例えば Astin et al. (2011) は、延べ10万人を超えるアメリカの大学生を対象として、

スピリチュアリティと、学業や心理的健康、大学生生活の諸側面との関連を縦断的に調査している。この一連の調査において、スピリチュアリティは、「人生の『大きな問い (big questions)』」に対する答えの積極的な探求 (スピリチュアル探求)、自民族中心主義や自己中心主義を超越したグローバルな世界観 (普遍的世界観)、他者に対するケアリングや慈悲の感覚 (ケアリング倫理)、それに伴う他者への奉仕を含む生き方 (慈善活動)、特に困難な局面でも落ち着きと中心の感覚を維持する能力 (平静さ) を含む、多面的な性質 (Lindholm, 2013, p. 13) と定義されたうえで様々な変数との関連性が分析されている²⁾。Astin et al. (2011) は調査結果を受け、学生のスピリチュアリティの発達を手助けすることは、ケアリングやグローバルな意識、社会正義への関与、急激に変化するテクノロジー社会でのストレスに対処する平静さを養うことになるとし、大学生のスピリチュアルな発達に高等教育は関心を払う必要があると結論付けている。

ところで、この Astin et al. (2011) の調査に見られるように、スピリチュアリティは多様な下位概念を有しており、高等教育領域におけるスピリチュアリティ研究でも、未だ確定的な定義があるわけではない (Gunnlaugson & Vokey, 2014)。そのため、例えば実存性と利他性を混

* Prevention Education Center, Naruto Education University
tyuntyunkotori@gmail.com

在した形でスピリチュアリティを一義的に捉え、何らかの変数や要因との関連を解明しようとしたとしても、実際にはスピリチュアリティのいかなる要因が関与しているのかが把握しづらいという問題があるだろう。したがって、スピリチュアリティのどの側面に着目するかを操作的に定義することが必要となる。

そこで本研究が着目したいのは、スピリチュアリティ教育においてしばしば議論の対象となる、「実存的問い」、「宗教的問い」、「形而上学的問い」等の「スピリチュアルな問い」、すなわち「大きな問い (Big Question)」である (Noddings, 1993; Palmer, 1998/1999)。例えばこうした問いには、「私は何者で、なぜここにいるのか」、「なぜ世界は、かのように存在するのか」といったものが含まれ、それを通して青年は、自らの知識、野心や憧れ、社会的仕組みに不足しているものを知ることになる (Parks, 2011)。また、「自分とはいったい誰なのか」、「どんな世の中をつくるのに役立つのか」といった「大きな問い」への答えを探求することは、進路決定や自己理解、ケアリング、社会的責任の発達などに関連することも示唆されている (Astin et al., 2011)。このように、「大きな問い」は、学習、進路、自己理解、社会との接点など、大学生の重要な側面と関わりをもつことが論じられてきた。

その他、林 (2011) による、スピリチュアリティの「問い」と「答え」の位相に関する議論も、「大きな問い」として規定されるスピリチュアリティと関連している。林 (2011) は、「問いのスピリチュアリティ」を、『『人生の究極の意味・目的』とは何か、それはどのようにしたらみいだせるのかを、自覚的に問題にしてゆこうとする関心・姿勢』(p. 13) とし、その最終的な答えは不問とするが、超越的次元が答えの可能性として問いにのぼっていることが重要であると言う。一方、「答えのスピリチュアリティ」

とは、「そうした『問い』に対して何らかの答え、方向づけを与えようとするもの」(p. 13) とされ、生かされていることへの自覚、超越者や来世の存在を肯定した生き方などが答えに含まれてくるが、問いが実存的に問いぬかれていれば、現世的、無神論的な答えが導かれても、それをスピリチュアルなものとして捉えることになる。

林 (2011) の議論を参照すれば、人生の究極的な問題を、その「答え」はオープンにしたまま、答えを求める「入り口」として扱うという立場は、宗教教育に慎重さを要する公教育の事情を考慮すると、教育領域でスピリチュアリティを扱う際の有益なアプローチとなり得るだろう。すなわち、「問い」の側面に焦点をあてることで、特定宗教の世界観が反映された「答え」を一方的に教授するのではなく、人生や自己存在の意味、超越的次元に対する「問い」を、ほぼ全ての学び手にとっての関心事として捉え直させ、そこから自発的に探求していく過程を重視した教育実践が可能となると考えられる。

さらに、こうしたスピリチュアリティ理解によって、「日常生活や人生の様々な局面で抱える問い」というように、より普遍性の高い、市井の人々の中に見出し得る現象としてスピリチュアリティを捉えられるが、このことは、文化や宗教の問題を考えるうえで重要となる。これまでも、例えば WHO の健康定義におけるスピリチュアリティの概念構造が、欧米の宗教観に影響されている可能性があり、むしろ日本人のスピリチュアリティは、個人差が大きいものの、「自然との対比における人の小ささ」、「自然への畏敬の念」、「祖先との関わり」、「個人の内的な強さ」、「特定の宗教をもたないにしても、何か絶対的な力の存在を感じる」といった項目への言及が共通して多いことが指摘されてきた (田崎・松田・中根, 2001)。また、日本人の神的存在に対する態度や信念に関する調査を行っ

た石井 (2007) も、「むしろ日本人は、ふだんはほとんど神に対する認識を持つことなく、また特別な機会においても、神の存在やその性格に思いを馳せることなく過ごしているということが出来る」(p. 186) と主張している。こうした調査結果から考察するに、わが国においては、特定宗教や様々な宗教的伝統という文脈における実践 (体験) 的側面に焦点化し過ぎてしまうと、スピリチュアリティを抽出し難くなる可能性があると言える。

一方で、本研究のような「大きな問い」について思慮する心性としてのスピリチュアリティは、宗教的・文化的要因の影響を受けやすい「超越的存在との関係性」において見出される体験的側面を重視したスピリチュアリティとは異なり、より万人に開かれたものとして見なすことができるだろう。大学生対象の「大きな問い」に関する実験 (村上、2013a) において、超越や宇宙に関する自由記述が得られにくいという結果が示唆するように、超越性に関する問いをどのように抱えるかについては、個人差が少なからず存在することが考えられるが、大学生対象の質問紙調査 (村上、2012) では、「人生の意味の希求」、「価値の探求」、「宇宙的思考」、「超越的存在への問い」という四因子構造が検証的因子分析で確認されるなど、問いについて思慮するスピリチュアリティは、わが国においても観察可能な概念として研究対象とすることができるのではないだろうか。

以上の議論を踏まえ、本研究ではスピリチュアリティを、「大きな問い」について思慮する心の働き、すなわち、「自己、世界、超越的存在の在り方や、生の意味、死や愛、価値など人生の根本的な問題について考える能力」と定義する。

この定義に照らし合わせると、Astin et al. (2011) の調査における「スピリチュアルな探求」は、「人生の意味や目的を探求するこ

と」、「人生の神秘に対する答えを見つけること」、「内的な調和を得ること」、「人生についての重要な哲学を考えること」等、「大きな問い」に対する答えを学生が探求する内的過程として捉えられていることから、本研究のスピリチュアリティ理解と類似した概念と言える。Astin et al. (2011) の調査結果によれば、スピリチュアルな探求得点の高い学生は、ケアリング倫理、普遍的な世界観、平静さといった特徴を示していた。またスピリチュアルな探求得点の上昇は、知的な自尊心やリーダーシップ能力に対する肯定的な影響を及ぼす反面、心理的ウェル・ビーイングや大学満足度は低下していることが明らかになった。詳細なメカニズムは明らかになっていないものの、こうした調査結果は、「大きな問い」に関与することが、学習面や精神的健康といった大学生にとって重要な心理的側面に影響を及ぼすことを示唆するものである³⁾。

そこで本研究が着眼するのが、こうしたスピリチュアリティを育成する教育実践の方法や要因である。先に述べたように、スピリチュアリティ研究においては、宗教的・文化的要因に留意する必要があるため、その知見の汎用性は限られたものになるかもしれないが、近年では、「大きな問い」を涵養する教育実践に関する議論も行われ始めている (Lindholm, Millora, Schwartz, & Spinosa, 2011)。例えば、カーネギーメロン大学が主に新入生を対象に実施している「大きな問いプログラム (Big Question Program)」では、学生が、「『良い人生』とは何か?」、「大学、地域、国、国際社会における自分の役割とは何か?」といった問いを、教職員を含むチームで多角的な視点から探求することになるという (Nair, Church, & Schwartz, 2007)。また、調査研究 (Astin et al., 2011) の知見を参照すると、スピリチュアルな探求得点の上昇要因として、自己内省や瞑想、読書や議論、教授によるこうした問いの探求の促進のほ

か、奉仕活動に従事することが挙げられている。内省や瞑想といった個人単位での取り組みのみならず、教授をはじめとする他者との議論や、奉仕活動という、他者との交流を通じた活動によっても、「大きな問い」としてのスピリチュアリティが涵養されることが示唆されているのである。

特に、奉仕活動とスピリチュアリティの関連性については、ホリスティック教育の中心的な論者であった Kessler (2000) も論じており、「人生の意味や目的の探求」はこうした利他的な行為によって涵養され得ると主張している。Kessler (2000) によれば、多くの生徒は、「自分たちの世界に貢献する機会を通して、人生の意味を見いだす」(p. 69) のであり、「愛情と他者のニーズをどのように合致させればよいかを知る機会を与えることで、意味や目的といった問題に間接的に関与することになる」(p. 70) と言う。より具体的には、他者を支援する活動を通して、心を開いてその場に存在することや、困っている人を援助する単純作業などがちょっとした贈り物になることを知り、そうした中で基本的な思いやりを表出することによって、人生の意味を感じる生徒もいると言う (Kessler, 2000)。サービスマーケティングのような利他的な行動を通して、他者に奉仕することの意味や、自身の思いやりを実感するような体験をし、生徒は、自己の果たすべき役割や存在価値への自覚を高めることにつながるであろう。

こうした Astin et al. (2011) の調査結果や Kessler (2000) の主張は、ボランティア活動やサービスマーケティングが、「大きな問い」について思慮するスピリチュアリティの涵養に寄与することを示唆するものである。わが国でも、スピリチュアリティ研究の文脈ではないものの、立命館大学サービス・ラーニングセンター開講の正課授業「地域活性化ボランティア」の受講生を対象とした調査研究 (河井・木村, 2013)

において、「この授業を通じて社会の仕組みや問題について考えた」、「この授業を通じて自分の価値観や考え方について考えた」などの項目から成る「リフレクション」因子が抽出されている。こうした調査は、回想法による自記式の回答のため、ボランティア活動を通じてどの程度こうした側面が向上したかを厳密に明らかにできるわけではないものの、価値や社会の在り方といった大きな問いに関連するトピックについて、一定の学生が思慮したことを示唆する結果となっている。

上記の知見や主張を踏まえると、青年のスピリチュアリティを涵養する取り組みの一つとして、奉仕活動やサービスマーケティングが関連していることが示唆されるが、Astin et al. (2011) や河井・木村 (2013) の研究では、こうした活動のいかなる側面や要因が、スピリチュアリティの向上に影響するか、詳細な検討が行われていない。すなわち、他者へ何らかの奉仕をすることが、自らの人生の意味や目的になり得るかどうかを考える契機となったのか、あるいは、ボランティアに従事する中で、様々な価値観やライフスタイルの人との出会いを通じて世の中のあり方や生き方を再考し、人生についての重要な哲学を考えるに至ったのか、スピリチュアリティが涵養される得る具体的な局面は不明なのである。そこで本研究では、大学教育の一環としてボランティア活動を行う青年にインタビューを行い、ボランティア活動のいかなる局面が、大きな問いに関して思慮をめぐらす契機となるかを明らかにすることを通して、スピリチュアリティとボランティア活動の関連を解明することを目的とする。

なお、ボランティア活動は、動機はどのようなものであっても、無償で、自発的な取り組みであることを特徴とする場合が多い。そのため、高等教育で実施されるスピリチュアリティ教育の一環としてボランティア活動を位置付ける場

合、いくつかの難点があることも考慮する必要があるだろう。例えば、白川・小林・立石 (2014) は、単位認定一つとっても、「無償性 (見返りとしての単位になるのではないか)」、「自主性 (単位のため活動する学生がいるのではないか)」、「利他性 (他者のためではなく、単位という自分のための活動になるのではないか)」、「先駆性 (教育課程に組み込まれた場合、先駆的な取り組みではなく、与えられたプログラムを行うに過ぎない状況になるのではないか)」という、ボランティアの特徴に反する様々な批判や問題が生じ得ることを指摘している。

いずれにせよ、教育課程におけるボランティア活動の位置づけについて、詳細な議論を行うことは本稿の目的ではない。しかしながら、現にボランティア活動がいくつかの大学の正課内外で実践され、東日本大震災を契機に再びその意義が再評価される現状にあるなか、ボランティア活動のいかなる側面が大学生のスピリチュアリティの向上に寄与するかを部分的にでも明らかにすることができれば、今後、わが国においてスピリチュアリティ教育の一方法としてボランティア活動を取り入れる際の基礎資料を提供することができるだろう。本研究では、課外活動の一環として、大学教職員が密な連携をとる大学公認のボランティア組織に焦点をあて、研究を行っていく。

方 法

調査時期と調査場所 インタビューは、X年Y月～X年Y+3月に、関西圏にあるA大学の空き教室で、60～90分間行われた。

調査対象者 関西圏にあるA大学でボランティア活動を行う大学生が対象であった。学生ボランティア団体の運営を担当する大学職員を通じて、研究の目的 (「ボランティア活動を行う学生を対象にインタビューを行い、活動をはじめ

たきっかけや、活動を通じて得たことを明らかにする)」、所要時間、場所、謝礼の有無、備考 (プライバシーの保護、参加辞退の機会保証) を明記したメールを学生に送信してもらった。調査に協力する場合、事前にインタビュー内容について考える必要がない旨も明記した。その結果、対象者A (女性、20代前半)、対象者B (女性、20代前半)、対象者C (女性、10代後半)、対象者D (男性、20代前半)、対象者E (男性、20代前半) の5名から連絡があり、5名全員を調査対象者とした。

調査手続き インタビューは1対1の半構造化形式で行われ、(1) ボランティア活動の開始時期、(2) ボランティア活動を開始した動機、(3) これまでのボランティア活動の内容、(4) ボランティア活動前後での変化の有無、(5) ボランティア活動を通じて、以前にはあまり考えなかったようなことについて考えるようになったという体験の有無を中心に、回答を求めた。(6) (5) の回答後、「教育におけるスピリチュアリティ」に関する学術書から選択したスピリチュアルな問いを、「大きな問い」 (「自己」、「世界」、「超越的存在や宇宙」、「生の意味、死や愛など」、「価値」に関する21項目) として例示⁴⁾ し、活動を通じて、これらの項目について考えたり意識したりするようになったことがあるかどうかを尋ねた。問いの一覧を、Table 1にまとめた。

倫理的配慮 参加協力を募る際、対象者に対して、「研究の目的と意義」「研究の方法」「プライバシーの保護」「参加辞退の機会保証」「不利益防止への配慮」等を明記した事前説明書を用いた口頭説明を行い、同意が得られた対象者に参加同意書へ署名してもらった。

分析手続 本研究は、ボランティア活動のいかなる側面において、「大きな問い」が思慮されるかを探索的に明らかにすることを目的としている。そのため、Coffey & Atkinson (1996) の

質的データ分析におけるコード化の留意点を参考に、既存の概念や分析枠組みにデータを還元するのではなく、ラベル（コード化）、カテゴリー、概念間の相互関連性を重視しながら分析を行った。分析にあたっては、インタビューを通して得られた調査協力者と筆者の語りから作成した逐語録をデータとし、実際の分析手順としては、徳田（2004）と山田（2011）を参考にした。まず、データ全体を精読し、上記の質問（2）、（4）、（5）、（6）を中心に、ボランティア活動における「大きな問い」に関する事柄に言及があった語りを抽出した。こうしてデータ

の内容や特徴に即してデータを区分し、その内容を端的に示すラベルを作成した。次に、ラベルについて繰り返しデータ間の比較を行い、類似性と差異を明らかにしながら、ラベルを整理・統合するためのカテゴリーを生成した。そして、カテゴリーをデータに立ち戻って吟味するため、データ、ラベル、カテゴリー間の整合性や、各カテゴリーが適切かどうかを検討しつつ、カテゴリーを洗練させていった。なお、ラベル生成は、山田（2011）を参考に、文脈が捨象されないよう可能な限り語りの具体性を担保した形で実施された。

Table 1 調査協力者に提示された「大きな問い」の一覧

カテゴリー	問いの例
主に自己に関すること	自分とは、どのような存在なのか
	自分はどこからやってきて、どこに向かおうとしているのか
主に世界に関すること	どのような世の中をつくるのに役立ちたいか
	人類や地球は、これからどうなっていくのか
主に超越的存在や、宇宙に関すること	神や仏とはどのような存在なのか
	人間を超えた大きな力のようなものは存在するのか
	宇宙はどのようにはじまったのか
	宇宙の中で、人間はどのような存在なのか
主に生の意味や死、愛などに関すること	生きることや人生に意味や目的はあるのか
	人生で本当に大切なこと、すべきこと、したいことは何か
	本当の幸せとは何なのか
	生命や人生の不思議に、自分なりの答えを見つけられるのか
	死とは何か
	苦難や不安、恐れにどのように向き合えばよいのか
	どうすれば希望や穏やかな気持ちを持ち続けられるのか
	愛とはどのようなものなのか
心から他者と分かり合うことはできるのか	
主に価値に関すること	深く共感できる価値を見つけられるのか
	真実と言えるものはあるのか
	善悪や正邪の問題とどのように向き合えばよいのか
	本当に美しいものとは何か

結果

以下、「大きな問い」に関連するデータに焦点をあて、ボランティア活動を始めた動機との関連、大きな問いについて考える契機となるボランティア活動の側面や体験について、分析の結果をまとめる。文中のイタリックは語りの抜粋、「[]」は筆者による補足、下線は筆者による強調、「…」は省略を示す。

(1) ボランティア活動を始めた動機との関連

まず、ボランティア活動をはじめた動機を対象者ごとにみていくと、活動を始めた動機と大きな問いとの関連が示唆されたのは、対象者Cのみであった。対象者Cは、「せっかく大学に入るし、意味あることっていうか、実りあることをしたいな」という思いがあったという。高校生以来、テレビなどを通してボランティア活動に興味を抱いていたこともあり、入学式の際の書類の中にボランティア関連の資料を見つけたことが契機になったという。さらに、インタビューが進んでいくうちに、純粋にボランティアをやってみたいという気持ちの他に、「どんなところで自分は…役に立てるのかなっていうのを…学びたいっていうか、色々知りたいなと思って入ったっていうのもありますね」という語りが得られた。自分がどのようなところで社会に貢献できるのかという、実存的な問いと関連した問いが、ボランティア活動を始めた動機の一因となっていることが示唆された。

その他の対象者の活動開始動機を順にみていくと、まず対象者Aは、新入生歓迎の際のチラシや、大学からの情報発信ツールを通してボランティア活動を知り、気になり始めたことがきっかけとなり、友人と一緒に大学のボランティア紹介機関を訪ねたという。また、対象者Aからは、現時点で振り返ればこそそう言え

るとしながら、高校の部活の選手のような立場ではなく、他者を支えるような、自分のためではない視点に立てる何かを行って見たかったという動機が存在していたように思われる、という語りが得られた。

次に対象者Bは、大学入学以前にボランティアを体験していたことや、対人援助関連の活動を行いたいという動機から、進学決定後、インターネット等を使用してボランティア情報を調べたという。そして、入学後、ボランティアに興味をもつ友人と、ボランティア紹介機関に訪問したことが、活動開始の契機となっていることが明らかになった。

対象者Dは、ボランティアのことは頭に全くなかったが、入学時に渡された勧誘のチラシでボランティア紹介機関の存在を知り、その際、高校の部活動の一環で行っていた清掃活動を楽しみながらやっていたことを思い出したこともあり、ボランティア活動を開始したという。

最後に、対象者Eは、友人が大学入学後にボランティア活動を始めたという話を聞き、意外だと感じたのもあり、自身もボランティアを始めてみようと思うに至ったという。そのような折、ふと、大学の提供するボランティア情報が目にとまったことがきっかけとなって、ボランティア活動を始めたということが明らかになった。

(2) 大きな問いについて思慮したボランティア活動の局面や体験

分析の結果、23のラベルと、7のカテゴリーが生成された。7のカテゴリーはそれぞれ、【ボランティア活動全体】、【障がい児・者支援活動】、【環境美化活動】、【スタッフの多様な考えの対立】、【友人・社会人との対話】、【他のボランティア団体との接触】、【ボランティア活動以外の生活場面】である。Table 2には、カテゴリー、ラベル、「大きな問い」との関連が示唆された

Table 2 ボランティア活動と「大きな問い」に関するカテゴリー、ラベル、語りの概要一覧

カテゴリー	ラベル	語りの概要
ボランティア活動全体		<p>A: お互いに思い合えたら、気持ちよく住める世の中になるのでは。</p> <p>D: ボランティアという言葉を意識せずに、そうしたことが普通にできる世の中になれば。</p> <p>E: 人のためにふるまう活動をするという意識が少しでも人々の中にあれば、軋轢が生じることもなくなってくるのでは。</p> <p>C: どういうところで自分は役に立っているのか。</p> <p>B: ボランティアを通して、自分のことを深く知ることができ、これまでやこれからのことを見つめ直せた。</p> <p>A: 幸せは画一的なものではない。それぞれの幸せが愛護されているから前向きに生きられるのでは。</p> <p>D: 幸せとは人によって違うのか、何が幸せなのか。自分の子が障がいを持っていると出生前に知ったら、どうするだろうか。</p> <p>E: ハンズを抱えている人たちの人生とはどういふものなのか、幸せをどのように得ていくのか。</p>
障がい児・者支援活動		<p>3 視覚障がい者の補助を通じて、大変そうというイメージが崩れた体験</p> <p>16 ボランティア活動全体を通じて、相手との関わりや自分の思いについて考えたこと</p> <p>18 障がい児支援の施設での体験</p>
環境美化活動		<p>1 河川での環境美化活動を通じて</p> <p>10 河川や図書館での環境美化活動を通じて</p>
スタッフの意見の対立		<p>5 ボランティア・スタッフ間で意見がまとまらない場面</p> <p>9 スタッフによる企画等の話し合い</p> <p>17 スタッフ間の対立</p> <p>19 異なるボランティア組織をもつスタッフとの関わり</p>
友人・社会人との対話		<p>8 震災ボランティアのスタッフから死に直面した人の話を聞く</p> <p>13 友人から、ボランティアは善人ぶりだけという考えを知らされる</p> <p>14 環境美化活動に関わる社会人から、ボランティアが人生に充実を与えるという話を聞く</p> <p>20 震災ボランティアの社会人から、社会を作る世代としての自覚を促される</p> <p>21 震災支援関係の会で、若者が何もしないことを指摘される</p> <p>22 社会人ボランティアから、若者を批判してばかりの大人こそダメな存在だと聞く</p> <p>23 友人から、多少いんどくても社会貢献できるボランティアを希望していると聞く</p>
他のボランティア団体との接触		<p>7 宗教団体のボランティアや、捨て犬の里親探しのボランティアを知る</p>
ボランティア活動以外の生活場面		<p>6 震災への自分なりの関わりについて考えたこと</p> <p>12 日常生活でゴミが捨てられている場面</p> <p>15 社会人になってからボランティアを始める人に関する記事</p>

語りの概要をまとめた。以下、カテゴリーごとに結果をまとめていく。

①ボランティア活動全体

このカテゴリーは、〈ボランティア活動全体を通じて〉、〈ボランティアからの帰路〉、〈ボランティア活動全体を通じて、相手との関わりや自分の思いについて考えたこと〉といったラベルから生成された。このカテゴリーは、特定のボランティア活動の局面というよりも、ボランティア活動全体を振り返った際の語りをまとめたものであることが、特徴として挙げられる。

このうち、対象者 A と対象者 D からは、「どのような世の中を作るのに役立ちたいか」という問いに関連した語りが得られた。

「[ボランティアの]優先順位の低い人とかもいると思うんで…意識の問題っていうふうにも思ったりするんですけど…私が思うのはやっぱり、お互い思えたら、思い合えたら、自分だけを優先して行動するっていうことは減ると思うんで、やっぱ譲れないものとかもあると思うんですけど、やっぱその折り合いをつけてうまく回っていくように世の中できるんじゃないかなと思うんで…自分中心じゃなくて、なんかそういう気持ちをちょっとでも持てたらとか、優先順位をちょっとでもあげれたら…お互いに気持ちいい、よく、住めるような世の中とかになるんじゃないかなと思います…気持ち的に、やっぱり満たされてたりすると…豊かさをわけようじゃないけど…全部自分が自分がじゃなくてっていうところも大事じゃないかと」(ラベル 4；対象者 A)

「よく思うのは、ボランティアって言葉が無くなるのが、一番いいなと思うんですよ…みんな意識せずに、ボランティア的なこ

とをしてくれたら、できる世の中っていうのが…僕らが…ゴミ掃除するのはボランティアって言われているじゃないですか…母の日に、お母さんに何かあげるのは別にボランティアとは言わないじゃないですか…それと同じように…掃除とかもみんなが普通にやってたら、別にボランティアとか言わなくなると思うんですよ…そういう世界になったらいいなと思いますね…まあ、そう思う反面で、そんな世の中は無理やなと思ったりもするんです…全然そんなこと [ボランティア] 考えてない人とか、ゴミとか普通にほっちゃうとかいう人も…いなくなると思うんで…どうしようもない人っていうのもいっぱいいると思うんです。そういう人に対しては、諦めみたいな気持ちもありますね」(ラベル 4；対象者 D)

対象者 A からは、自分中心でなく、互いが思い合えるようになることが、気持ちよく住める世の中ではないかという語り、対象者 D からは、ボランティアという言葉がなくなり、人々が、利他的な活動を当然のように行う世の中が理想ではあるが、その実現は難しく、諦めのような気持ちがあるという語り、対象者 E からは、他者のために活動するという意識が人々の中にあれば、軋轢が無くなっていくのではないかという語りも得られた。こうした語りからは、他者のために活動すること、利他的活動が当然のこととなりボランティアという言葉が無くなることなど、ボランティア活動を通じて涵養されたことが示唆される、利他性に基づく世界観が思慮されていることが明らかになった。

また、自分はどうのような場所で役に立てるのかという問いは、対象者 C がボランティアを

開始した動機の一つであったが、「学校生活が結構忙しいときは、もうそっちで手一杯なんですけど…ボランティアに行った帰りとか、長い休み…とかあんまり忙しくないときは、ふとちょっと思ったりしましたけどね」(ラベル4)というように、ボランティア活動を継続していく中で、抱えられ続けている問いであることが示唆された。

②障がい児・者支援活動

このカテゴリーは、〈視覚障がい者の補助を通じて、大変そうというイメージが崩れた体験〉と〈障がい児支援の施設での体験〉という、ボランティア活動の側面に関するラベルから生成された。以下に抜粋する語りで見られるように、幸福に関する「問い」に関連した語りが共通して得られた。

「私もよくくらべちゃうんですけど、ほかのひと。でもなんかやっぱり、その人の幸せはその人の解釈なのかなって思います…画一的なものじゃないなっていうのは思います…[視覚障がい者の中に]へこんでるっていうか、落ち込んでる方が、まあこの中に限ってはいなかったんで…自分が、幸せっていうのを、なんかこういうことができるから、自分はなんか、うれしい幸せみたいなところをもっていて、それが実現できてるから、こういう前向いて生きていけるっていうか、あんまりこう悲観されずに、生きるんじゃないかなって思って…まあ私は私であると思うんですけど、その幸せは何かっていうのをつかめて、それを実現できるように、して、できたら、まあ、あの、自分は自分で幸せって言えるんじゃないかなと…大変っていうイメージがあっても、そうじゃなかった…一つじゃないんだなって思いました」(ラベル3；対象者A)

「障がいもった子とかやったら、う～ん、僕らまあちょっと可哀そうやなとか思ったりするんですけど、本人は別に、それを自覚してないと思いますし、本人はたぶん普通に生きてて、別に、楽しいと思うんですね。その別に、まあ苦勞することもあるかもしれないですけど、そういうので、まあ…幸せって、人によって違うのかなあとか思いますね。その子はその子で、幸せやたらええんかなとか、何が幸せなのかとか、う～ん」(ラベル18；対象者D)

以上の語りで見られるように、対象者Aと対象者Dからは、ボランティア活動先での他者との出会いを通して、幸福感を抱く基準は人によって異なり、相対的なものなのではないかということについて思慮した体験を有していることが明らかになった。さらに対象者Dは、そうした施設での体験を通して、自分にとっての幸せとは何かを考えることはあるのか、という筆者の問いに対し、以下のように回答している。

「そこまではっきりとは考えたことないかもしれないですけど、うっすらとはそう思ったりはしますね。例えばその、自分の子どもが…生まれたりするときに、お腹の中にいるときに…なんか障がいもってとかあったりとかしたら…そういうときに、自分はどうするんやろうとか考えたことありますね…そのまま産ましてあげて、その子が育て、生きるのがいいのか、生まれさせてあげないほうがいいのかとか。…わからないですし、実際僕がどういう行動するかもわからないですし…」(ラベル3；対象者D)

こうした対象者Dの語りからは、出生前に自

身の子どもが障がいをもっていることが明らかになった場合、どのようにすればよいのかを考えていることも明らかになっており、ボランティア先で問いを抱えることが、生命倫理にも関連する更なる問いに結びついていることが示唆された。

なお、対象者Eからは、「普通に何の障がいとか抱えてない人とかでも、なかなか心から楽しく生きている人たちって多分今はそんなにいないかなあと思うんで。一体こういう風なハンデを抱えてしまっている人たちの人生っていうのはどういうものなんだろうって…今後どうなって、どういう風に幸せを得ていくんだろうなと思ったりとか」（ラベル3）という語りが得られている。対象者Aや対象者Dのように、相対的な幸福観へ言及するのではなく、心からの幸福を抱きにくい現代において、障がいを抱えた人の人生について思慮している様子が伺えた。

③環境美化活動

このカテゴリーは、〈河川での環境美化活動を通じて〉、〈河川や図書館での環境美化活動を通じて〉というラベルから構成される。ボランティア活動のうち、自然や図書館の美化活動での体験に関する語りが得られている。

まず、対象者Aからは、河川での環境美化活動を通じて思慮した内容について、以下の語りが得られた。

「人間もなんですけど、環境とかも、全部こうおっきい輪の中にあって、本当になんかぐるぐる循環しているような感じがします…ボランティアみたいな、まあ手助けっていうかすることで…環境がきれいになったり…その人が困っている状況から解放されるとか…オリンピックの火の受け継ぎみたいな感じなんですけど、ああいう感じで、自分がされてうれしかったから次の人にし

ようみたいな、そういう気持ちがあまれるかもしれないし。環境やったりすると…こういう活動している人がいるから、まあ自分としてもここ気を付けようって思う人もいるかもしれないし…もっと海とかきれいになって、また戻ってくるかもしれないし」（ラベル1；対象者A）

以上の語りにおいては、人間も環境も、一つの大きな輪の中にある存在であり、他者や環境に対して利他的な行為をすることが、また別の他者に善意として伝わったり、環境が改善され、将来的に自分たちに戻って来たりするといったような、循環的でホリスティックな世界観が涵養されていることが明らかになった。

対象者Cからは、自然でのボランティア活動に加え、図書館での落書き消しの活動を行った体験から、ゴミを捨てたり落書きしたりすることが無くなり、こうしたボランティアを行わなくて済むことを希望しているといった語りが得られた。これは、「どうすれば希望や穏やかな気持ちを持ち続けることができるのか」という問いに関連した語りであった。

④スタッフの意見の対立

本研究の対象者は、ボランティア団体に所属し、日々の活動に従事している。このカテゴリーは、その構成員であるスタッフの間で、意見の衝突が生じた際の出来事を中心としたラベルから生成されたものであった。ラベルには、〈ボランティア・スタッフ間で意見がまとまらない場面〉、〈スタッフによる企画等の話し合い〉、〈スタッフ間の対立〉、〈異なるボランティア観をもつスタッフとの関わり〉などが含まれている。

まず、対象者Bは、「真実と言えるものはあるのか」という問いに関連して、「まとまらないことが多かったので、そのボランティアをやって。みんな、それぞれの意見があって、どれ

が正しいとか、どれが間違っているとかってないんだなっていうのを…それぞれの想いをちゃんと組み入れてやっていかないといけないなっていうことは思うようになりました」(ラベル5)と語っており、ボランティアという目的のもと集まる人々の間に生じる見解を統合していくことの難しさを実感していた。

同じく、様々なボランティアについて「許容範囲がすごく広がったような気が」するという対象者Dからも、異なるボランティア観をもつスタッフとの交流を通して、様々な価値観の統合と対立について思慮している様子が伺える。

「ボランティアは…形がないって言いましたけど、ほんまに人によって全然違いますし、だからなんか、価値観を合わせようとするんじゃない、あわせるんじゃない、違うっていうのはわかりながら、違うならどうやって…共存できるか…気持ち的には、この子の考え方嫌だなとったりして…拒絶するというか…認めないっていうのは…するべきじゃないと思うんで…自分の考え方と違うからはねつけるってちょっともったいないと思うんですよ…頭では…それ [自分とは異なる他者の意見] も考え方やなって思うんですけど、気持ちとしてはなんかちょっと、『うーん』みたいな。『この子と…一緒にやっつけていけるのかな』みたいなのとかあったりとかします」(ラベル19; 対象者D)

また、対象者Cは、インタビューで提示された問いほど深く考えたことはないとしながらも、ボランティアを企画する際の議論において、立場の異なるスタッフのことを理解し、信頼することが重要となるため、簡単ではないものの、互いにわかり合うことができればよいと考えていることが明らかになった。また、多様な価値

観を有する人々が集まるボランティア団体で、意見の対立等を体験する中で、「どうすれば希望や穏やかな気持ちを持ち続けることができるのか」との関連から、「同じ学年の子とも話し合うこともありますし、それでちょっといらってきたり、色々ぶつかってることもありますし…メンバーの中でも、結構穏やかな気持ちをいつも持ち続けたい」(ラベル9; 対象者C)といったことを感じていることも明らかになった。

⑤友人・社会人との対話

このカテゴリーは、調査協力者が問いについて思慮する場面として、友人や、ボランティア活動先で出会う社会人との対話に関係していることから生成された。〈震災ボランティアのスタッフから死に直面した人の話を聞く〉、〈友人から、ボランティアは善人ぶりだけという考えを知らされる〉、〈環境美化活動に関わる社会人から、ボランティアが人生に充実を与えるという話を聞く〉、〈震災ボランティアの社会人から、社会を作る世代としての自覚を促される〉、〈震災支援関係の会合で、若者が何もしないことを指摘される〉、〈社会人ボランティアから、若者を批判してばかりの大人こそダメな存在だと聞く〉というラベルから生成されたカテゴリーである。

まず、対象者Bは、被災地のNPOの人へ話を聴きに行った際、死に直面し、余震で怖い思いをしている人のことを知り、どのようにして不安に向き合えばよいのかということについて考えた体験があることが明らかになった。また対象者Bは、その後もこうした問いを意識することがあり、インターネットを使うなどして、不安への向き合い方などについて簡単ながら調べた体験もあることが明らかになった。

次に、対象者Eからは、環境美化のボランティアに関係する社会人との会話を通して、ボランティアが人生に充実感を与える可能性があ

ることを知り、「本当の幸せとは何か」、「人生で本当に大切なこととは何か」といった問いと自身のボランティア観との関連について語っている。

「〔美化活動が〕自分たちの人生において、暮らす充実を与えてくれるみたいな話をしていたので…若いうちからこんなすばらしい活動に参加できることを、すごい、充実してるねえみたいな。本当にいいことだよ、みたいなことをおっしゃる人らで…何気なくやってるけど実はすごいことなのかなとかって考えたりとかしましたね…自己満足になるんじゃないのかなという思いもあって…僕自身はボランティアが自分の人生の深い部分とか、充実を与えてくれるものになるとは、ちょっと考えてない…まだこの段階では。もっと人生生きていったら考えが変わったりすることもあるのかもしれない…」（ラベル14；対象者E）

現段階での「答え」は、ボランティアが自身に根本的な充実感を与えるものではないとしながらも、社会人との会話から、ボランティアに対する価値や意味づけを相対化する機会を得ていることが明らかになった。

なお、対象者Eからは、ボランティア活動を通して、以前は考えなかったようなことを考えるようになったという体験の有無を尋ねたところ、「実際いろいろ楽しんで、いろんな人とかかわっていくっていうのも大事だと思いますし…しんどいですけどその中でも互礫を一生懸命撤去したりとかして、ただただ社会の役に立つっていうのも両方正しいかなと思って。何が正しいとかっていうのは多分ないと思うんですけど」（ラベル23）という、ボランティアの多様性を受容していることが示唆される語りも得られた。これは、友人と東日本大震災のボラン

ティアに行った際、サロンでの活動を提案したが、実際に行くからには肉体労働のような活動で社会貢献したい旨を告げられたことが契機となっていた。

この他にも対象者Eは、友人が、ボランティアはただ暇だから善人ぶりただけと考えていることを知り、「そんなに本心から人の役に立ちたいと思ってやってるのか、それともただそういう風に社会的にいい側面として一応見せたいからやっているだけなのか、どっちなのだろうみたいな」（ラベル13）ということを考えていることが明らかになった。これに関連して、大学が主催する震災ボランティア関連の会合で、「若者が何もしようとしないこの事態は日本としておかしい」ことを指摘され、「現実にはそんなにボランティア精神が根付いてやってるわけじゃないのかもしれないとかっていうのは、そのときにちょっと思ったりとかもしました」（ラベル14）とも語っており、純粋な利他性なのか偽善なのか、という葛藤を感じていることが示唆された。

また、東日本大震災のボランティア先の社会人ボランティアから、若い世代が活動をし、社会を作っていくかといけなことを指摘され、それが、「自分たちがこれから本当に多分、社会に出ていく存在なので、やらないといけなんだなという思いとかですかね…小さなことでもいいんでちょっとだけ、その辺りの、地域の環境だったりを変えていかなきゃいけないんだな、みたいな」（ラベル20；対象者E）といったことを考える契機となっていた。こうした社会人との会話は、「どのような世の中を作るのに役立ちたいか」という問いに関連した事柄を思慮する側面となっていることが伺えた。

対象者Eにとって、こうした社会人との対話は、「心から他者と分かりあうことができるのか」という問いについて考える契機にもなっていた。具体的には、社会人が、若者を批判し

てばかりいる大人を批判した話を聴き、「分かり合うことと違って、もしかしたらそういう、互いが互いを認めることでできていくのかなあと違ってちょっと考えたことがありますね…」(ラベル 22) と述べ、相互理解を深めるための着想を得ていることが示唆された。

⑥他のボランティア団体との接触

このカテゴリーは、「宗教絡みのボランティアや、捨て犬の里親探しのボランティアを知る」というラベルから生成された。他のボランティア団体との接触を通して、大きな問いに関連する事柄を思慮しているという点に、特徴がある。以下の抜粋は、「善悪や正邪の問題とどのように向き合えばよいのか」という問いに関連した対象者の語りである。

「すべてがいいことじゃないというのもあるので、なんかボランティアっていう項目で案内とかがきてても、それが宗教絡みだったりとかもあるので、ただ単に、単純にその、表だけみてもだめだし、ちゃんと裏までみてとかは考えましたかね…ボランティアっていう名前だけで、それがいいってわけでもなくてっていうのは思っていました。 [捨てられた動物の愛護ボランティアの見学を通して] 外部の人とからも…環境的にも…賛成されてないっていうか…やっ
てることはすごくいいことだし、私もいいなとは思んですけど…衛生的な部分とかで色々言われていて、そういうのもあるんだよなとか…動物とかの命を守ってあげたいけど、なんか、どうしたらいいのかなとか、どうやったらいいんだろうとか」(ラベル 7 ; 対象者 B)

自分たちの団体内だけではなく、外部のボランティア団体の活動を知ることを通して、ボラ

ンティアという名目が利用されてしまうことがあることや、行為の意図は理想的なものでも、取るべき方法によっては周囲からの反対の対象となってしまうことから、ボランティアという名のもとに行われる活動が一義的に善ではないことを実感している様子が伺える。

⑦ボランティア活動以外の生活場面

最後は、ボランティア活動そのものではないが、日々の生活の中で、利他的行動が要求される場面に遭遇した際に、「大きな問い」について考えたという体験に関する語りに基づき、カテゴリーが生成された。このカテゴリーは、〈震災への自分なりの関わりについて考えたこと〉、〈日常生活でゴミが捨てられている場面〉、〈社会人になってからボランティアを始める人に関する記事〉というラベルから成る。

まず、東日本大震災との関連から、「人生で本当に大切なこと、すべきこと、したいことは何か」といった問いに関する語り、対象者 B から得られた。

「現地に行って、観光するだけで、お金を落とすだけとかでも、一つのボランティアって言えると思うので、そういうふうにしたいなと思ってたんですけど。結局できずに…『思っているだけじゃだめだよな』とか。[生の意味、死や愛との関連を尋ねたところ、「人生で本当に大切なこと、すべきこと、したいことは何か」と重なるかもしれないとの回答があり] う～ん。大切なこと。自分が今すべきことはなんだろう…就活というか試験とか色々あったので…そっちに目を向けなきゃいけないっていうのもあるけど、それだけにいくのもだめだし、まあせっかくボランティアを色々活動してきて、震災のこともあって、なんかできないことはないのかなとか…友人とかで

も、…NPO法人とかの現地にいってお手伝いするボランティアとかに行っている子もいたんですけど…周りの外部に出て、その団体に入るっていう勇気がどうしてもなくて…どうしたらいいんだろうとか、今やるべきことはって思いました」（ラベル6；対象者B）

以上の語りからは、自身の進路や学業を疎かにすることができないという心情と、ボランティア活動に継続的に従事してきたからこそ、被災地や被災者に対して何か利他的な活動を行うことができないかという心情との間で揺れ動く様子が読み取れる。

また、対象者Eは、自己犠牲的な精神を日常生活で意識しすぎるようなことはあるか、という筆者の質問から、自身の利他性を疑ったという体験に関する語りも得られた。具体的には、アパート近くにゴミが散らかっていても、見て見ぬふりをする自分があり、ボランティアを好きでやっているならこうしたゴミも捨てる必要があるのではないか、本心からボランティア精神が根付いているわけではないのかもしれない、ということ考えたという。この他にも対象者Eは、仕事とは別に自分のやりがいとして、社会人からボランティアを始める人がいることを記事で読み、「人生で本当に大切なこと」「本当の幸せ」「人生の不思議に自分なりの答えを見つけられるのか？」といったことに関連して、ボランティアが人生に充実をもたらす元になることがあるのかもしれない、ということ考えたという。

以上のように、ボランティア活動以外でも、ボランティアに関連する事柄に日々の生活の中で出くわした際に、ボランティアを行う自分自身を振り返ったり、ボランティアが生き方に及ぼす影響について考えたりすることが示唆された。

考 察

本研究の目的は、「大きな問い」としてのスピリチュアリティが、ボランティア活動のいかなる局面を通して涵養され得るかを、質的研究を通して検討していくことにあった。

まず、ボランティア活動を開始した動機として、「どのようなところで役に立てるのか」に関する問いが、対象者Cによって、大学入学当初抱かれていたことが明らかになった。このことから、既に「大きな問い」を青年が抱いている場合には、それが、新たな学習機会の獲得へと発展する動機づけとなる可能性が示唆された。スピリチュアリティの「生きるうえでの価値の希求」は、探究心を媒介し学習意欲を向上させることが明らかになっているが（村上、2013b）、対象者Cの語りは、問いを抱くことが、新たな学習機会の探索へとつながることを部分的に支持する結果であったといえよう。すなわち、「自分はどのようなところで世の中に対して役立つことができるのか？」という問いを抱くことが、他者や社会に貢献する機会を与えてくれるボランティア活動という、新たな学習機会の探究の動因になることが示唆された。

次に、大きな問いについて思慮を巡らすボランティア活動の局面に目を転じると、【ボランティア活動全体】、【障がい児・者支援活動】、【環境美化活動】、【スタッフの意見の対立】、【友人・社会人との対話】、【他のボランティア団体との接触】、【ボランティア活動以外の生活場面】という7つのカテゴリーが生成された。

これらのカテゴリーのうち、ボランティア活動の具体的な局面に言及があったものに着目すると、【障がい児・者支援活動】、【スタッフの意見の対立】、【友人・社会人との対話】、【他のボランティア団体との接触】、【ボランティア活動以外の生活場面】といったカテゴリーにおい

て、「他者との出会いによる視点の拡張」という共通性を見出すことができるのではないだろうか。ここでの他者とは、ボランティアをともに実施するスタッフ、ボランティア先で援助対象となる他者、ボランティア先で出会う先輩ボランティア、友人、他ボランティア団体などを含み、広範な概念である。そして、こうした他者との出会いを通じて、幸福（幸福とは画一的なものではなく人によって異なるもの、ボランティアには人生に深い充実をもたらす側面もあるのか等）、価値や善悪（どの立場もある側面では正しい、自らのボランティア活動の動機は純粋な利他性なのか等）、希望や穏やかな気持ちの維持（死に直面する人々が抱える不安の存在を知る等）、人生で本当に大切なこと（進路や学業という自分の事柄を大切にすることはいけないのではないか等）といった大きな問いについて、それまで参加者が有していた考えや視点が、一度相対化されるという体験を有していることが示唆された。Kessler (2000) は、青年が、利他的行為の実践を通して人生の意味を感じることを指摘しているが、本研究の知見が明らかにしたのは、ボランティア活動という利他的行為そのものではなく、それを表現する場での他者との相互作用による視点の相対化という体験が、人生の意味をはじめとする、大きな問いについて考える能力の涵養に関連しているということである。

実際、従来のボランティア研究においても、ボランティア活動に関与する他者との関係性が重要であることは、様々に指摘されてきた。例えば稲場 (2006) は、「価値観の衝突を乗り越えるような、他者との共同作業の場が必要である（略）様々な人を受け入れて、社会的バックグラウンドの違い、あるいは肌の色も違う、人種を超えた人々が共同で何かをしていく、そのような場が必要である。その中で、価値観の衝突は当然生じるが、それが実は思いやりの精神

の発達に不可欠なものである」(pp. 6-7)と述べ、利他的精神を育てる環境に重要なものとして、価値観の対立に遭遇する局面を挙げている。また、山田・井上 (2009) による大学生を対象としたボランティアの調査でも、「出会い」、「人間関係」といった他者とのコミュニケーションに関する成果意識が醸成されていることが明らかになっており、ボランティア活動を通じた、他者との相互作用や関係性の側面は、大学生のボランティア活動において、重要な側面を占めていることが見て取れよう。本研究においても、大きな問いについて思慮するスピリチュアリティの涵養を促す一つの要因として、こうした他者との関係性が、重要な役割を担うということが示唆されたのである。

また、この点について、Fowler (1981) の信仰発達理論の観点から、若干の考察を加えておきたい。Fowler (1981) は、ピアジェやコールバーグなど、従来の認知発達理論に依拠しつつ、人生の意味や価値を形成する人間に普遍的な意味形成の心理的メカニズムを信仰として捉え、六段階からなる構造発達の視点で理論化した。ここで信仰とは、「信念、価値、意味の形成の基調となる、統合的な中心化の過程として特徴づけられ、(1) その人の人生に一貫性や方向性をもたらし、(2) 他者と共有される信頼や忠義に関連付けられ、(3) より大きな参照枠とのつながりの感覚のもとで、個人の姿勢やコミュニティの忠義の基礎となり、(4) それぞれの人生において究極的な質を有するものに依拠することで、人生の課題や死に向きあい、対処することを可能にする」(Fowler & Dell, 2006)と説明されるように、「他者」や「価値と力の中心」との関係性における行為として捉えられている (Fowler, 1981)。また、信仰発達理論においては、信仰が、単一的な視点に特徴づけられる自己中心的なものから、それらの批判的な内省を経て、対立するものや両極的なも

の（「男性性と女性性」など）を自己の内に統合し、最終的には超越的存在との視点に結びついた普遍的なものへと変容していく過程が、「社会的意識の境界」、「権威の所在」、「世界の一貫性の形式」といった諸側面から描かれている。

この社会的意識の境界とは、「在る人が人生の意味を形成するとき、その意味形成に誰が含まれ誰が除外されているかを指し示すための概念」（西脇、1998、p. 23）であるが、本研究のインタビュー結果からは、ボランティア活動に従事することによって、意味や価値の形成に関与する「社会的意識の境界」が拡張することが示唆された。すなわち、Fowler（1981）の信仰発達理論の知見を参照すれば、それまで自身の価値や意味づけの中心であった家族や身近な人々のいる枠組みや境界から、大学内外において、ボランティア活動に関わる多様な文化・価値的背景を有する他者と出会うことで、社会的意識の境界が拡張すると共に、意味や価値を構成する信仰の内容や構造に、多少なりとも揺さぶりが生じていると捉えることができるのではないだろうか。本研究では、対象者の語りから、信仰構造の発達段階を記述することに焦点をあてていないものの、ボランティアに参加する学生の変容や学習成果を、信仰発達理論の観点に基づくスピリチュアリティの発達的变化という観点から捉え、その構造的変化を縦断的に記述していくことも、今後の研究の展開となろう。

最後に、ボランティア活動において、大きな問いについて思慮した「契機」ではなく、その「内容」についても、若干の考察を行っておきたい。本研究の対象者からは、ボランティア活動と、「超越的存在や宇宙に関すること」との直接的な関連性に言及した語りはほとんど得られなかった。本研究の結果は、神仏の存在を意識的に自覚することの少ない日本人の特徴（例えば、石井、2007）が反映されたものであったのかもしれない。

一方、対象者 A からは、人間も自然環境も、循環する大きな輪の中にあり、利他性が順次巡っていくという、循環的でホリスティックな世界観に関する語りが得られた。こうした世界観は、「定期的に教会活動に参加したり、集会や法要・儀礼などには参加しない」（稲場、2011、p. 125）が、「無自覚に漠然と抱く自己を超えたものとのつながりの感覚と、先祖、神仏、世間に対して持つおかげ様の念」（p. 124）を特徴とする、「無自覚の宗教性」と関連したものと捉えることもできよう。すなわち、神や仏など超越的存在を強く自覚するものではなく、自己、世間、環境などが全て一つにつながっており、そのおかげ様の中で自分も生きているという感覚に根付いた、日本文化特有の宗教性（スピリチュアリティ）に近い語りであったのではないだろうか。

もっとも、こうした超越的次元とボランティア活動との関連性については、ボランティア実践者の宗教的信条や背景を要因として組み込んで、詳細な検討を行っていく必要があるだろう。例えば、キリスト教主義大学に在籍する大学生を対象とした、災害ボランティア活動に関する研究（岡村、2013）では、自己の変化に対する回答の中で、「被災地での祈りのなかで、神様の計画とか、神のみこころという言葉が、まったく使えなかった。以前は、そういった言葉を頻繁に使っていたけれど、物事をあまり深く考えずに使っていたと思う」（p. 37）という、一神教的な宗教観に基づく語りが得られている。また、檜尾（2011）は、スピリチュアリティの論考において、「日本の武道や芸道の『道』の礼法や、新宗教の掃除などの奉仕活動による心直しの実践では、他者に対する礼節的利他的行為という『型』をまず行ってみるによって、つまり自己超越意識に到達した人間と同じような社会的行為を行うことによって、器としての行為主体に、結果として自己超越的意識の質を

盛り込んでいく」(p. 44)と述べているように、掃除などの奉仕活動を通して、自己超越意識(「宇宙や空といった絶対的存在との出会いや合一という霊的次元へ拡大・成長・展開した意識」(pp. 41-42)が涵養されることが想定されている。こうした宗教的文脈における利他的行為に従事する者を対象とした場合には、超越的次元に関する大きな問いについての語りにも、相違点が生じることが予想される。

大きな問いの「内容」のうち、第二の特徴的な側面として、ボランティア活動によって涵養されたであろう、利他性が反映された語りが得られたことが挙げられる。特に、【ボランティア活動全体を通じて】というラベルのもと、「互いに思い合う世の中」、「ボランティアという言葉を用いなくても、自然とそうした行いができる世の中」、「他者のために活動するという意識が人々の中にあれば軋轢が無くなっていくのではないか」、といった語りが得られた。こうした対象者の語りからは、ボランティア活動が内包する利他性が、世界観などに関する「大きな問い」の思慮に影響を及ぼしていることが示唆される。本研究は、回想法による一回のみのインタビュー調査のため、その解釈には限界が伴うものの、ボランティア活動を実際に体験することによって、利他的な行為の重要性を認識し、それが、自己や世界に関する問いについて思慮する契機や、またそうした問いを思慮する際の参照枠組みを与えているのではないだろうか。稲場(2006)によるボランティア活動を行う青少年に対するインタビュー調査において、「人のあたたかみがわかった」や「道端で募金している人の気持ちがわかるようになった」という、利他的な精神を実感する語りが得られていることから、自身の体験に根差した利他性の理解が、自己観や世界観の構成に影響している可能性が示唆されたのである。

以上のように、本研究では、ボランティア活

動におけるいかなる局面が、スピリチュアルな問いについて思慮する契機や要因となるかを中心に分析を行った。これにより得られた知見は、大学教職員との密な連携のもと展開される課外活動の一環として、ボランティア活動に従事する学生数名の語りに基づいており、その意味で限定的な知見であることは言うまでもない。正課内外、単位や評価の形態等、様々な外的要因によってその活動は変化していくことが予測されるため、様々な文脈のもとボランティア活動を行う学生を対象とした研究が実施されることで、スピリチュアリティが涵養される側面がより多面的に捉えられるだろう。そのため、あくまで本研究で得られた知見に基づく範囲ではあるものの、スピリチュアリティ、ボランティア活動、教育領域との接点を考察しつつ、今後の研究の展望を述べることで本論を締め括りたい。

まず、高等教育におけるスピリチュアリティを議論するにあたって、こうした問いを抱くことが、日常生活や大学での学習といかに関連するかを明らかにしていくことが挙げられる。例えば、ボランティア活動に従事する大学生が思慮した問いには、「本当の幸せとは何か」、「自分はどのような社会をつくるのに役立ちたいか」などが含まれていたが、これらは、心理学、政治や経済、福祉などと関連する問いであると言える。こうした問いを抱くことが、既存の講義への参加意欲に影響を及ぼすことがあるのか、また、大学での講義だけではなく、読書やインターネット等を用いた情報検索、他者との対話など、大学生の自発的な学習行動にいかに関わりつついくのかを調査することによって、ボランティア活動の中で問いを抱えるという体験がもたらす、学習の「広がり」や「深まり」を明らかにすることが可能となるだろう。

例えば、正課授業「地域活性化ボランティア」に参加した受講生を対象とした調査(河井・木村、2012)では、リフレクション(大きな問い

との関連が示唆される事柄を、ボランティア活動を通じてどの程度思慮したかに関する指標)の高さを示す群の学生は、リフレクションの低さを特徴に示す群に比べ、「私は今後、地域を良くするための活動に関わっていくつもりである」といった「シビック」や、「自分が今後探究していきたいテーマを見つけた」といった「インクワイアリー」の得点が高いことが明らかになっている。また、本研究の対象者Bからは、不安への向き合い方について問いを抱き、インターネットを通じた自主学習を行ったという語りが得られていたし、災害ボランティアに参加した学生の意識や行動の変化についての調査(小林,2014)でも、大学での学習と、ボランティア活動を直接に結びつけようとしていたり、勉強会や講演会など、学外へ学習の場を広げたりしていることが明らかになっている。今後は、こうした問いを抱くことが、ボランティア活動と日常生活場面での学習行動との媒介(あるいは促進)要因となり得るかどうかを解明することで、高等教育におけるスピリチュアリティ実践の議論を蓄積することができるだろう。

高等教育へのスピリチュアルなアプローチについて、Astin(2004)は、近年増えつつあるサービラーニングを取りあげ、「つながり(connectedness)」と「省察(reflection)」という二側面とスピリチュアリティとの関連を論じている。前者は、学生と被援助者のみならず、学生同士の関係性においてプロセスが構築されること、後者は、サービラーニングの体験が、学習内容という観点だけでなく、学生自身や人生にとってどのような意味をもつかを省察させることが教育学上の鍵になる、というのである。本研究では主に、スピリチュアリティ発達の重要な側面として、「他者との出会いによる視点の拡張」が浮かび上がってきたが、この点は、Astin(2004)の「つながり」と関連した側面であると言えよう。一方で、後者の「リフレク

ション」については、これまでもその重要性が指摘されており、例えば奉仕活動先で認識した社会的現実(ホームレスの一時収容所等)について、個人や集団、口頭や記述等様々な方法を用いて省察させることで、学生に新たな問題意識を生じさせることが提案されてきた(Jacoby 1996 山田訳 2009)。こうしたボランティア活動における省察の役割を重視するのであれば、その方法の一つとして、「大きな問い」という視点から、学生自身のボランティア活動を振り返ってもらうことも可能ではないだろうか。すなわち、体験を通して抱いた問い(もちろん、そうしたことについて考えなかった学生も含めて)を、個人内に留めておくのではなく、活動後に改めて問い直し、議論の俎上に載せるという試みである。河井・木村(2012)の調査では、ボランティア活動を通じたリフレクションが、更なる学習意欲の賦活に寄与し得ることが示唆されており、「大きな問い」という視点から自らのボランティア活動を語り直し、その体験の意味を再構成してもらうことによって、他の学習活動との連動性をもたせることができるかもしれない。

最後に、高等教育から、生涯学習へと研究の射程は広がっていくが、成人や高齢者に対するインタビューを行うことも、今後の研究の展開の一つとして挙げられる。この点について強く意識したのは、「そういう[障がい児支援]のにボランティアとして参加してる方たちもいて、その人たちは、人生観みたいなものとか、僕とは違ってすごい深いことを得てそういうことをしているのかなあと…多分人とかかわるボランティアしてる人のなかに…こういうこと[大きな問い] 考えて生きてる人たちが確かに、本当にいると思うんですね」という、対象者Eの語り契機となっている。こうした、異なる年齢層のボランティア活動従事者を対象とした調査を行うことによって、大きな問いについて

思慮するスピリチュアリティの横断的相違点を明るみに出し、ボランティア活動と大きな問い、学習行動との関連をより詳細に知ることができるであろう。世代による違いを浮き彫りにする作業を通して、青年期に特有の「大きな問いと学び」について考察し、より十全な教育的アプローチについて議論することが望まれる。

註

- 1) 本研究は、博士論文『大学生のスピリチュアリティにおける探究心媒介モデル』（平成25年）の一部に加筆・修正を加えたものである。また、本研究の一部は、日本人間性心理学会第31回大会で発表された。
- 2) Astin et al. (2011) の研究では、「授業の一環で奉仕活動に参加する」、「慈善事業に寄付をする」、「個人的な問題を抱えた友人を助ける」などの項目を含む慈善活動は、スピリチュアリティの「実践的側面」の一つとして取りあげられている。また、「利他主義（他者の苦痛や苦悩への感受、利他的な愛と行為への献身）」をスピリチュアリティの構成概念の一つとして定義する場合があるように（Elkins 1998 大野訳 2000）、利他的な行為や態度そのものを、スピリチュアリティと考える立場もある。しかしながら、本研究ではスピリチュアリティを、「大きな問い」について思慮する能力として捉えるため、ボランティア活動そのものをスピリチュアルなものであるとは考えず、こうした活動を通して、「大きな問い」がいかに思慮されることになるかという側面に焦点をあてることになる。
- 3) わが国でも、大学生のスピリチュアリティと学習面との関連が、徐々にではあるが研究され始めている。例えば、スピリチュアリティの実存や価値に関する側面について思慮する頻度は、低い値ながらも、批判的思考態度（クリティカルシンキング）の探究心と証拠の重視を媒介して、学習意欲や進路選択行動に正の影響を及ぼすことが明らかになっている（村上、2013b、2014b）。
- 4) 本研究で提示した大きな問いは、村上（2012）の Big Question 尺度（BQS）に含まれる項目と同様であるが、因子分析法の結果を受け、後の尺度作成に際して除外した項目も、インタビュー時には含まれていた。項目の選定方法については、村上（2012）を参照。

引用文献

- Astin, A. W. (2004). Why spirituality deserves a central place in liberal education. *Liberal Education*, 90(2), 34-41.
- Astin, A., Astin, H., & Lindholm, J. (2011). *Cultivating the spirit: How college can enhance students' inner lives*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Chickering, A. W., Dalton, J. C., & Stamm, L. (2006). *Encouraging authenticity and spirituality in higher education*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Coffey, A., & Atkinson, P. (1996). *Making sense of qualitative data: Complementary research strategies*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Duerr, M., Zajonc, A., & Dana, D. (2003). Survey of transformative and spiritual dimensions of higher education. *Journal of Transformative Education*, 1(3), 177-211.
- Elkins, D. N. (1998). *Beyond religion: A personal program for building a spiritual life outside the walls of traditional religion*. Wheaton, Ill: Quest Books. (エルキンス, D. N. 大野純一 (訳) (2000). スピリチュアル・レボリューション: ポストモダンの八聖道 コスモス・ライブラリー)
- Fowler, J. W. (1981). *Stages of faith: The psychology of human development and the quest for meaning*. New York: HarperCollins.
- Fowler, J. W., & Dell, M. L. (2006). Stages of faith from infancy through adolescence: Reflections on three decades of faith development theory. In E. C. Roehlkepartain., P. E. King., L. M., Wagener., & P. L. Benson, (Eds.), *The handbook of spiritual development in childhood and adolescence*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications, pp. 34-45.
- Gunnlaugson, O., & Vokey, D. (2014). Evolving a public language of spirituality for transforming academic and campus life. *Innovations in Education and Teaching International*, 51(4), 436-445.
- 林貴啓 (2011). 問いとしてのスピリチュアリティ 京都大学学術出版会
- 稲場圭信 (2006). 慈善活動に参加する青少年ボランティアの利他的精神の発達とスピリチュアリティに関する社会学的研究 マツダ財団研究報告書、18、1-8.
- 稲場圭信 (2011). 利他主義と宗教 弘文堂
- 石井研士 (2007). データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版 新曜社
- Jablonski, M. A. (2001). *The implications of student spirituality for student affairs practice*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Jacoby, B. (1996). Service-learning in today's higher

- education. In B. Jacoby, et al. (Eds.), *Service-learning in higher education: Concepts and practice*. San Francisco, CA: Jossey-Bass, pp. 3-25. (ジャコビー, B. 山田一隆 (訳) (2009). こんにちの高等教育におけるサービスラーニング 桜井政成・津止正敏 (編) ボランティア教育の新地平—サービスラーニングの原理と実践— ミネルヴァ書房 pp. 51-79.)
- 樫尾直樹 (2010). スピリチュアリティ革命—現代霊性文化と開かれた宗教の可能性 春秋社
- Kessler, R. (2000). *The soul of education: Helping students find connection, compassion, and character at school*. Alexandria, VA: ASCD.
- 小林功英 (2014). 第5章 災害ボランティア経験が持つ大学生へのインパクト RIHE, 126, 37-43.
- Lindholm, J. A. (2013). Methodological overview of the UCLA spirituality in higher education project. In A. B. Rockenbach, & M. J. Mayhew. (Eds.). (2012). *Spirituality in higher education: Translating research into practice*. New York, NY: Routledge.
- Lindholm, J. A., Millora, M. L., Schwartz, L. M., & Spinosa, H. S. (2011). *A guidebook of promising practices: Facilitating collegestudents' spiritual development*. <http://spirituality.ucla.edu/docs/promising-practices/Promising_Practices_web.pdf>
- 村上祐介 (2012). Big Question 尺度作成の試み 心理学叢誌, 8, 65-78.
- 村上祐介 (2013a). 「大きな問い」の筆記が大学生の心理的側面に及ぼす影響 心理学叢誌, 9, 31-47.
- 村上祐介 (2013b). スピリチュアリティが学習意欲に及ぼす影響 日本心理学会第77回大会発表論文集, 1097.
- 村上祐介 (2014b). スピリチュアリティが進路選択行動に及ぼす影響 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 261.
- Nair, I., Church, J., & Schwartz, H. (2007). Big questions: A first year faculty fellows and student affairs collaborative program. *Spirituality and Higher Education Newsletter*, 3(3), 1-3.
- 西脇良 (1998). ファウラーの信仰発達理論に関する文献研究 カトリック教育研究, 15, 21-30.
- Noddings, N. (1993). *Educating for intelligent belief or unbelief*. New York: Teachers College Press.
- 岡村直樹 (2013). キリスト教大学における震災ボランティア活動と宗教心の発達: mission系学校におけるサービスラーニングの観点から キリストと世界: 東京基督教大学紀要, 23, 23-47.
- Palmer, P. (1998/1999). Evoking the spirit in public education. *Educational Leadership*, 56(4), 6-11.
- Parks, S. (2011). *Big questions, worthy dreams: Mentoring emerging adults in their search for meaning, purpose, and faith*. revised ed. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Rockenbach, A. B., & Townsend, T. (2013). Addressing religion and spirituality in educational settings. In K. I. Pargament. (Eds.) (2013a). *APA handbook of psychology, religion, and spirituality*. Vol. 1. *Context, theory and research*. Washington, DC: American Psychological Association.
- 白川優治・小林功英・立石慎治 (2014). 第1章 大学における災害ボランティア活動の教育効果を検討するために RIHE 126, 1-14.
- Subbiondo, J. L. (2006). Integrating religion and spirituality in higher education: Meeting the global challenges of the 21st century. *Religion and Education*, 33(2), 20-33.
- 田崎美弥子・松田正己・中根允文 (2001). スピリチュアリティに関する質的調査の試み 日本医事新報 4036, 24-32.
- Tisdell, E. J. (2003). *Exploring spirituality and culture in adult and higher education*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- 徳田治子 (2004). ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ: 生涯発達の視点から 発達心理学研究, 15, 13-26.
- 山田嘉徳 (2011). 先輩後輩関係を指導単位とするゼミ制度の有効性に関する一考察: B&S 制度における協同的な学びに着目して 京都大学高等教育研究, 17, 1-14.
- 山田一隆・井上泰夫 (2009). ボランティア活動から学生は何を学ぶのか—2007年度立命館大学学生調査を事例として— 桜井政成・津止正敏 (編) ボランティア教育の新地平—サービスラーニングの原理と実践— ミネルヴァ書房 pp. 21-50.

謝辞

本論文の執筆にあたり、懇切丁寧なご指導を賜りました申崎真志教授 (関西大学文学部) に心より感謝申し上げます。また、本研究にご協力くださった皆様方にも、ここに記して御礼申し上げます。

抄録

本研究の目的は、「大きな問い」について考える能力としてのスピリチュアリティと、大学生のボランティア活動との関連を調査することであった。ボランティア活動を行う大学生5名に半構造化面接を行った。その結果、ボランティア活動を始める動機として、大きな問いが影響していることが示唆された。また、ボランティア活動において大きな問いについて考える局面

として、ボランティア活動全体、障がい児・者支援活動、環境美化活動、スタッフの意見の対立、友人・社会人との対話、他のボランティア団体との接触、ボランティア活動以外の生活場面というカテゴリーが得られた。こうした結果から、大学生のスピリチュアリティの涵養には、「他者との出会いによる視点の拡張」という側面が寄与していることが示唆された。最後に、今後の研究の展望として、大学生や成人のスピリチュアリティ、ボランティア活動、学習活動との関連を明らかにすることが論じられた。

key words: spirituality, encountering, higher education

Abstract

The purpose of this study is to examine the relationship between spirituality as the ability to consider “big questions”

and voluntary activities (VA) of university students. Semi-structured interviews were administered for five university students engaging in VA. The results showed that big question might become a catalyst to start VA. It was also found that seven categories were extracted as occasions to consider the big question through VA: the entire VA, support activities for children or people with disabilities, environmental beautification activities, conflicts of staff’s views, dialogue with friends or adults, contacts with other voluntary organizations, and daily situations outside of VA. These results indicated that “an expansion of perspective through encountering others” contribute to cultivate university students’ spirituality. Suggestions for future research to examine the relationship among spirituality, VA, and learning activities of university students or adults were discussed.